所属・氏名（心理科学部　臨床心理学科　氏名：鹿嶌達哉　）

	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
1	（論文）研究者のウチとソト：準拠する社会と探究する社会のつながり	単著	2013 年 3 月	質的心理学フォーラム第 4 号 6-13	質的な心理学研究の過程において研究者が出会う社会と研究者が所属・準拠する社会との関係を考察した。研究対象（者）はさまざまな社会に所属し、多様な視点からとらえられること、その問題性も研究者の視点や立場から異なること、研究の過程においてある社会に巻き込まれていること、知ることにより書けなくなる対象性があること、テーマの理解に際して研究者が拠って立つ社会を一つの基準として意識化していくことが重要であることが考察された。
2	（報告書）心理学を学んで社会へ：2014 年度施策マネジメント「心理科学部におけるキャリア支援：高校における進路指導から就職後の評価まで」	共著	2015 年	心理学を学んで社会へ：2014 年度施策マネジメント「心理科学部におけるキャリア支援：高校における進路指導から就職後の評価まで」報告書	心理科学部の学生に対して、高校時の進路選択の状況、在学 4 年間における学びとキャリア発達・支援、就職活動等について質問紙と面接から明らかにした。心理科学部には就職よりも心理学への興味で入学するが、4 年間に種々の能力を身につけ、カウンセラー以外の「一般就職」にもキャリア発達がつながっていることが示された。 鹿嶌達哉・鈴木亮子・大藤弘典 （執筆箇所：p2～37、49～63、68～70、73、77、80～82、84、88～89）
3	（論文）思春期の問題行動に対する青年期のとらえ直し(3)～大学生の教師に対する見方とその受講による変容～	単著	2014 年 12 月	広島国際大学教育論叢 第 6 号 17-28	思春期における教師との関係と体験を大学の受講後の感想の分析から明らかにした。思春期において生徒は、Ⅰ）理解されたり見守られたりする関係を形成していた。Ⅱ）問題に対して、相談により対応された一方で、対応の失敗や見て見ぬふりをされた経験もあった。Ⅲ）教師は、特別な存在であり、一人の人間であることが当時は気づかれにくかったが、人間性はたとえダメな部分でも評価される場合があった。教師のやりがいと難しさの両面が把握され、カウンセラーとの違いにより教師の専門性をより理解した。
4	（論文）思春期の問題行動に対する青年期のとらえ直し(4)～大学生の学びに対する見方とその受講による変容Ⅰ～	単著	2015 年 12 月	広島国際大学教育論叢 第 7 号 25-34	大学生の子ども時代の学びに関する体験と受講による学びに対する見方の変化を、受講後の感想の分析から明らかにした。学びの意味は、「軸Ⅰ：学びそれ自体が目的～別の目的のための手段として学び」として A 楽しみ、B 興味－J 自己成長、K 教養―C 理解・知識、D・考える力、I 幅広い考え－E 判断力、F 問題解決―H 将来の準備－G 有用性・役立つ、「軸Ⅱ：私のための学びと社会のための学び」として J 自己成長－K 教養－L 社会性・コミュニケーション、「軸Ⅲ：これまでの学び、今の学び、これからの学び」として過去－現在－未来という時間軸に整理された。
5	（論文）思春期の問題行動に対する青年期のとらえ直し(5)～思春期と青年期における父親との体験の異同と思春期に対する見方の変化～	単著	2016 年 12 月	広島国際大学教育論叢 第 8 号 21-32	大学生の思春期と青年期における父親との体験を授業後の感想から明らかにした。思春期において父は「特別な存在から一人の人間」として見られ始め、「見守りながら相談に乗り叱責をする存在」となった。へだたりも感じ始め、嫌悪感や対立も生じるようになった。青年期になると父は尊敬され、類似性が記されるようになる。見守り助言することは変わらないが、一人の人間としてより見られるようになり、中年期の変化や祖父母との関係が記されるともに、批判の対象ともなっていた。思春期における父との体験は青年期に転機、意味づけ、関連づけ、変容によりとらえ直されていた。